メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2022 年 11 月 22 日（Vol.174）
「秋から冬に観たい広重の名所絵と俳句」

「秋から冬に観たい広重の名所絵と俳句」

歌川広重『名所江戸百景』 九十一.「猿わか町よるの景」 より

めぐり来る季節に合う名画と俳句、第七回目は前回に続き歌川広重（うたがわ ひろしげ）（1797-1858）の『名所江戸百景』から秋から冬に観たい作品と俳句です。

今回は七十七番「京橋竹がし」、九十一番「猿わか町よるの景」、百十九番「王子装束ゑの木大晦日の狐火」と夜の景を三点取りあげています。
満月の夜の月明り、月は出てなくても星明かりの下の情景をプルシアンブルー（ペロ藍）など質のいい絵の具と、「雲母摺（きらずり）」の技法など腕のいい彫師、摺師と協力し、繊細に色味の調節を重ねて創りあげた作品を多く選びました。

俳句とともにお楽しみ下さい。

1．上野山内月のまつ　（うえのさんないつきのまつ）

『名所江戸百景』九十

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_089.jpg

九十．上野山内月のまつ　｜　安政四年（1857 年）八月

　くるりと円を描いて曲がった奇妙な松の枝が描かれています。
これは上野寛永寺の清水堂付近にあった「月の松」と呼ばれた名木で、形が満月を連想させることから名付けられました。

幹と枝を画面手前いっぱいに配し、遠景を覗き見る構図です。
月の松の向こうに広がるのは不忍池で、右下には池の中之島にあった弁天堂が見えています。

寛永二年（1625 年）に建立された寛永寺は、東の比叡山という意味で、山号は東叡山とされました。
その際、不忍池を琵琶湖に見立てて、竹生島に対して中之島が築かれ、竹生島弁財天に対して中之島弁財天が建立されました。

松の枝や幹に施されたぼかしは効果的で、不思議な立体感を出しています。

ここでは秋が深まり、まわりの木々が紅葉したり、落葉したりしているなか、変わることなく緑の美しい松を讃える晩秋の季語「色変へぬ松（いろかえぬまつ)」を詠んだ句を選びました。

枯淡などまつぴら色を変へぬ松
鷹羽狩行（たかは しゅぎょう）（1930-）

太幹をくねらせて色変へぬ松
片山由美子（かたやま ゆみこ）（1952-）

２．京橋竹がし　（きょうばしたけがし）

『名所江戸百景』七十七

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_076.jpg

七十七．京橋竹がし　｜　安政四年（1857 年）十二月

　満月に浮かび上がる橋と竹がびっしりと立ち並んだ河岸。
このあたりは竹の問屋が集まっていたため、竹河岸と呼ばれていました。
筏（いかだ）に組まれた竹材が隅田川から八丁堀を経て運ばれました。
規則正しく立てかけられた竹は幾何学的な美しさが感じられます。
竹は正月飾り、七夕飾り、竹垣、竹細工など現代よりはるかに多くの需要が当時の江戸にはあったようです。

描かれた橋は京橋で、夜にもかかわらず多くの人々が行き交うのが見えます。
橋の下を通るのは荷船で、船頭は見事な満月に見とれているようです。

京橋は東海道を日本橋から京都に向けて進むとき、最初に渡る橋であったことに由来して京橋と名がついたといわれています。

橋の欄干に施されたロシアの教会の大聖堂の塔を小さくしたような装飾を擬宝珠（ぎぼし）といい、江戸の橋でこれがあったのは他に日本橋と新橋だけでした。

橋の中央をゆく人物の提灯（ちょうちん）に「彫竹（ほりたけ)」の文字があります。
これはこのシリーズを手掛けた彫師のうちの一人の名です。
広重さん、共同製作者のやる気アップにつながる演出をしっかりとしています。

ここでは三秋の季語「月」を詠んだ句を選びました。

様々や心の上の秋の月
勝見二柳（かつみ じりゅう）（1723-1803）

竹伐（き）って月の光に打たせあり
長谷川櫂（はせがわ かい）（1954-）

3．浅草田甫酉の町詣　（あさくさたんぼとりのまちもうで）

『名所江戸百景』百二

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_101.jpg

百二．浅草田甫酉の町詣　｜　安政四年（**1857** 年）十一月

　ここは吉原の妓楼の二階と思われ、ちょこんと座ったかわいらしい猫が、格子の先を眺めています。猫の体にはふっくらとした立体感があり、これはきめ出しと呼ばれる技法が用いられているようです。

窓の外には浅草の田んぼが広がり、遠景には富士が描かれ、夕暮れの中、巣に帰る雁の群れも見えています。
田んぼには大勢の人々がシルエットで描かれ、鷲（おおとり）神社の酉の市に参詣する人々の姿が小さいながら活写されています。

酉の市は毎年十一月の酉の日に行われる行事で、参詣客は来る年の開運と商売繁盛を願い、縁起物の熊手を買い求めました。

室内に目を転じると、出窓には使用済みの手拭と茶碗が置かれ、畳には熊手の形をあしらった簪（かんざし）が見えます。

この簪をよく見ると、うち一本に「おかめ」と「松茸」の飾りがついています。
傍（かたわ）らにはちり紙などの用途で用いられる懐紙（かいし）の一部が見えていて、これは屏風の陰で行われていることを暗示するために広重さんが考えた、にやりとさせる「洒落た遊び」のようです。

猫はそんな女主人に拗（す）ねてか、出窓から外を眺めています。

ここでは初冬の季語「酉の市（とりのいち）」「熊手」を詠んだ句を選びました。

その奥におかめが笑ふ大熊手

長谷川櫂（はせがわ かい）（1954-）

二の酉を紅絹（もみ）一枚や蛇をんな

（紅絹＝絹織物の一種で、紅花で真赤または緋色に無地染めした絹の布。
　蛇をんな＝祭りや縁日の見世物小屋での出し物。）
太田うさぎ（おおた うさぎ）（1963-）

4．猿わか町よるの景　（さるわかちょうよるのけい）

『名所江戸百景』九十一

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige,_Night_View_of_Saruwaka-machi.jpg

九十一．猿わか町よるの景　｜　安政三年（1856 年）九月

　夜空に満月が浮かんでいて、芝居見物を終えた人々が家路につこうとしています。
人々の影が路面にのびていて、手前の犬たちの影まで描いているのもご愛敬です。
長く伸びた影は浮世絵では珍しい表現で、道の両側に立ち並ぶ建物が遠近法を用いて整然と描かれています。
影も遠近法も西洋由来の表現ですが、広重はしっかりと自分のものにしています。

描かれているのは浅草の北東にあった、猿若町と呼ばれていた芝居町です。
それまで日本橋堺町、葺屋（ふきや）町、木挽（こびき）町などで営業していた芝居小屋が、天保十二年（1841 年）の火災を機にこの地に集められ、江戸歌舞伎の創始者、猿若（中村）勘三郎にちなんで猿若町と名づけられました。

画面右手前から森田座、市村座、中村座と続き、左側には芝居茶屋や人形芝居の結城座などがあり、役者や芝居関係者も付近に住居を構えていました。
このうち、森田座は一時休座していましたが、この絵が出る少し前に興行を再開し、その御祝儀もあって、森田座だけ明かりがともっています。

江戸時代の歌舞伎役者は毎年十月に興行主と契約を更新していました。
新しい顔ぶれとなる十一月興行を「顔見世」といいます。
役者が勢ぞろいし、一年間この顔ぶれで芝居をしますと、観客に「顔を見せる」重要な年中行事でした。
演目に歌舞伎十八番のひとつ「暫（しばらく）」（善良な民衆を助けるため主役が花道から「暫く」と声をかけ登場する勧善懲悪もの）を取り入れるなど約束事がありました。

顔見世初日前日から徹夜で並ぶほど、観客は興行が楽しみだったようです。
東京・歌舞伎座では十一月興行、京都南座では十二月興行があります。

ここでは仲冬の季語「顔（皃）見世」を詠んだ句を選びました。

皃（かお）見せや人の中より明烏（あけがらす）
小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）

顔見世のまねき見て立つ手をつなぎ
富安風生（とみやす ふうせい）（1885-1979）

5．王子装束ゑの木大晦日の狐火

（おうじしょうぞくえのきおおみそかのきつねび）

『名所江戸百景』百十九

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige-100-views-of-edo-fox-fires.jpg

百十九．王子装束ゑの木大晦日の狐火　｜　安政四年（1857 年）九月

　暗闇の中、一本の榎の古木のまわりに狐が集まっています。
毎年、大晦日の夜に、関八州の狐たちが、関東の稲荷総司である王子稲荷神社のもとに参集するという伝説があります。
この榎を高く飛んだ順に官位を授かり、命婦（みょうぶ、宮廷の中級女官）装束に着替え、王子稲荷へ参詣しました。

本図では口から狐火を発する狐たちが、榎をかこんでおり、近隣の農家はこの狐火の数で翌年の豊凶を占ったとされています。

広重は藍や墨を基調に、ぼかしを多用して、寒々とした大晦日の夜を暗く、繊細に表現しています。
暗闇と対照を成すように、狐と狐火が幻想的に浮かび上がっています。
遠景に描かれた無数の狐火と夜空に浮かぶ星たちも美しい。

『名所江戸百景』の目録で最終図に位置付けられた本図は、シリーズで唯一、現実ではない伝説の情景を描いた作品です。

狐火は山野や墓地など闇夜に見られる正体不明の青白い炎のことをいいます。
狐が口から吐き出す火だと信じられていたため、「狐火」と呼ばれるようになりました。

一説では狐が食べる動物の骨が燃えて、燐光（りんこう）を発するのではないかとも、雨が降ったあと、燐が空中で燃えるためともいわれています。
この「王子の狐火」の伝説がもとで狐火は三冬の季語になりました。

狐火のでることうそでなかりけり
久保田万太郎（くぼた まんたろう）（1889-1963）

太郎に見えて次郎に見えぬ狐火や
上田五千石（うえだ ごせんごく）（1933-1977）

私も詠んでみました。

丑三つを待って狐火数ふやし
白井芳雄

今回は「秋から冬に観たい広重の名所絵と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：小池満紀子・池田芙美著
『広重 TOKYO：名所江戸百景』（講談社）(2017 年)
ISBN978-4-06-220507-8

太田記念美術館監修 日野原健司・渡邉晃文
『広重 名所江戸百景』（美術出版社）(2017 年)
ISBN978-4-568-10495-0 C3070

安村敏信監修
『広重「名所江戸百景」の旅 あの名作はどこから描かれたのか？』（平凡社）(2014 年)
ISBN978-4-582-94568-3

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア（Wikipedia）

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター　メルマガ担当　白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター　〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F
TEL：06-6358-0141　FAX：06-6358-0134　E-mail：info@tic-co.com